岩手県立大槌高等学校について

■ 学校の概要

岩手県立大槌高等学校は、岩手県上閉伊郡大槌町にある唯一の高校です。大槌高等学校は、大槌町と連携し「大槌高校魅力化プロジェクト」を立ち上げ、「大海を航る、大槌（ハンマー）を持とう」をコンセプトとし、「三陸地域の復興とその先の未来をリードする高校生を育てる、魅力ある学校づくり」に取り組んでいます。

■ 学校の教育の特色について

大槌高等学校では、平成31年に文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受けて、学校設定教科「地域みらい学」を開設し、町内へのフィールドワークや多様な社会人との対話を通して、主体的に学ぶ力を育む科目として学校設定科目「三陸みらい探究」を開始しました。令和３年度には、国語・数学・英語・理科・社会について大槌町を題材に学ぶ学校設定科目５科目を開設し、教科を横断した学びを進めました。

「三陸みらい探究」の特徴的な取組として、マイプロジェクトがあります。生徒が自ら企画を立てて、地域社会の課題解決や魅力を探る活動を行っています。例えば、「東日本大震災の被害」をテーマにした生徒の取組により大槌町の「防災行政無線」が見直されるなど、高校生の探究的な学びが地域に変化を与えています。

また、「はま研究会」では東京大学大気海洋研究所の協力のもと、大槌湾に生息する生き物の調査活動に取り組んでいます。釣り活動など身近な活動から大槌湾の漂着物について研究するなどの本格的な海洋研究まで様々な活動に取り組んでいます。

■ 取組の成果と今後の方向性

大槌高等学校では、入学者数の減少や「三陸沿岸部の復興を担い、リードする人材の育成」の必要性から「大槌高校魅力化」に取り組みました。魅力化の一環として開始した学校設定科目「三陸みらい探求」のマイプロジェクトなどを通し、「自分の言葉で語れる」生徒が増加し、「チャレンジ精神が芽生え、それらを学校全体で応援する雰囲気」が醸成されてきています。また、高校魅力化の成果は数値にも表れています。令和3年度の入学者数は高校魅力化に取り組む以前の平成31年度と比較し約45%上昇しています。大槌町内の進学率も平成31年度では41%でしたが、令和3年度では55%と向上しています。

今後は「地域みらい学」を通した、一般教科などの基礎的な学力の向上に取り組む予定です。

【基礎情報】

＜大槌町について＞

・人口：11,164人（令和３年１１月３０日時点）

・隣接する自治体：山田町、宮古市、遠野市、釜石市

＜大槌高校について（令和３年５月１日時点）＞

・学科：普通科２学級　教養コース、文理コース

・生徒数：１年生　61名

２年生　教養コース26名、文理コース25名

３年生　教養コース26名、文理コース15名

在校生へのインタビュー

Profile
照井姫歌さん

岩手県立大槌高等学校２年生

生徒会長の照井姫歌です。バドミントン部に所属し、部長として部活動をまとめ練習に励んでいます。将来は、管理栄養士として食を通して人の健康を支えたいと考えています。

■ なぜ、この学校を選びましたか？

私が大槌高校に入学した理由は、生まれ育った地域で学びを深め成長しながら恩返しをしたいと思ったからです。大槌は東日本大震災津波で大きな被害を受けました。私も当時たくさんの支援を頂き助けられ今があります。震災当時は小学１年生と幼く、助けられるだけの立場でした。しかし、成長するにつれ今度は私たちが助けられる側から助ける側にならなければいけないと感じました。大槌高校には震災後に発足した有志の「復興研究会」があります。大槌高校の先輩方が実際に町を歩き、町の風景を写真に収める定点観測班の活動、子どもに勉強を教えたり遊び相手になるキッズステーション班などの活動を行っています。それらの活動に興味があり、大槌高校に入学すれば復興に携わることができると思いました。他にも、同じ中学校の部活動でお世話になっていた先輩方が大槌高校に通っていて、一緒にまた部活動を行い、多くのことを教えて頂きたいと思いました。また、その先輩方から大槌高校の話を聞き、大槌高校は他の学校では行っていない活動や授業、そして校則も少しずつ変わっていったと聞き、大槌高校なら楽しく新しいことに挑戦でき、自分らしい高校生活を送ることができると考え、大槌高校を選びました。

■ 普段の学校生活の様子はどのようなものでしょうか？

現在、新型コロナウィルスの影響により、多くのことが制限され、あたりまえの日常とは遠い状態です。しかし、生徒は今の状態を受け入れ感染対策を行いながら、賑やかで楽しく充実した生活を送っています。大槌高校は、地元小中学校から進学する生徒が多いですが、今年度から初の県外生が入学し、とても良い刺激となっています。各学年男女問わず、団結力が強く、多くの生徒が率先して諸活動に取り組んでいます。特に、部活動、研究会の活動は活発で、生徒の個性を発揮できる活動も多くあります。また昨年度、校則検討委員会が発足し、校則の見直しにより大槌高校は校則がとても厳しいイメージから、生徒の主体性を尊重し、生徒が通いたくなる学校に変化しています。生徒が自ら校則と向き合い、時代や社会の変化を踏まえ、先生や家族、地域を巻き込んで検討を重ねています。また、授業にも特徴があり、学校設定教科「地域みらい学」では、地域を題材として国語・数学・英語・理科・社会を学び、身につけた知識を実践的に活用する力を育んでいます。町内へのフィールドワークや多様な社会人とのつながりもあり、個人の興味関心に寄り添った様々な活動に取り組みながら充実した生活を送っています。

■ 学校の好きなところ、通ってよかったと思うところは何ですか？

通ってよかったと思うことは３つあります。１つ目は、私の大好きな大槌町と共に歩み成長できること、そして復興に携わることができることです。大槌高校は東日本大震災の時に避難所となったことから、復興や町づくりに力を入れており、復興研究会の活動を通して自分の町の様子について知ることが出来ます。私は震災当時の街の様子をあまり覚えていません。そのため、大槌高校での活動により、昔の大槌町の様子を知るきっかけになりました。大槌高校に通ったからこそ、大槌町を知ることができました。２つ目は、校歌にもあるように「常に鍛えてたゆまざる」意思を感じられることです。大槌高校は進化し続けています。校則検討委員会による校則の見直し、魅力化に伴い特徴のある授業や、大槌高校でしか学べない研究会など、変化を恐れず前進する学校であることに誇りを感じます。３つ目は、生徒に寄り添い、個性を大切にしてくれることです。先生方が生徒一人一人の活動や進路について親身に考え、支えてくださることです。不安や悩みがあっても、先生方の協力があるからこそ行動することができます。生徒も先生も、お互いに信頼し安心して生活を送ることができます。

卒業生へのインタビュー

Profile
古川真愛さん

武蔵野大学
アントレプレナーシップ学部１年生
（岩手県立大槌高等学校2021年卒業）

現在興味のある分野は芸術。将来は、人に迷惑をかけないような人間になれればいいなと思っています。

■ 今の進路を選んだ理由は何ですか？

武蔵野大学アントレプレナーシップ学部へ進学いたしました。この学部は、2021年度に開設された新学部で、日本で唯一アントレプレナーシップ（起業家精神）を学ぶことができる学部です。高校に入学したての頃、漠然と抱いていた大学のイメージは、「就職までのモラトリアム」というものでした。私自身、当時は特段活動をしているわけでもなく、ただ高校生活を浪費しているだけの人間だったので、このまま生活を続け、皆と同じように大学へ行き、同じように就職するのだろうと考えていました。しかし、高校２年時から探究活動を始めたことで、そんなステレオタイプに疑問が生じました。せっかくなら、大学での４年間も、探究活動と同じように挑戦し続けたい、実りあるものにしたい、と考えるようになりました。この学部は、まず日本で唯一アントレプレナーシップを学ぶことができるということ、そして、様々な分野で起業をし、多くのノウハウを持っている魅力的な教授の方々がいるという所に、一番に惹かれました。まさに、挑戦するにはうってつけの環境ではないかと、当時の自分は思いました。現在は、上記のような恵まれた環境の中、充実した学生生活を過ごしております。

■ この学校で学んだことは、どのように今の自分に役に立っていますか？

大槌高校では、主体性を持って、何かの活動に取り組むということを一番に学びました。探究活動をしていなかった頃の私は、積極的に活動を行うことはあまりなく、受動的な学生生活を送っていたのですが、大槌高校で学んでいくうちに、自ら様々な活動に参加するようになり、より多くの学びを受け取ることができるようになりました。最終的には、自ら実験を企画するなど、進んで活動を起こす、活動に巻き込むといったところまで成長することができました。

他に、友人たちと行った多くのグループワークは、現在大学で活動する上での礎となっています。大槌高校では、復興研究会や校則検討委員会など、たくさんの魅力的な課外活動があります。時折、意見をぶつけ合うなどして、議論が白熱しすぎてしまうということはあったのですが、その経験があったからこそ、より大きく成長することができました。そういった活動を通して、共通の目標にむかって邁進していくというのは、大学生となった今大いに生かされています。大槌高校での学びは、今の自分を構成する要素として、外せないものになっています。

■ 高校で体験したことで、印象的な出来事や経験は何ですか？

大槌高校で、私が三年生の時に発足された校則検討委員会で、実際に我々生徒の意見で、校則を変えることができたということが、印象的でした。時代にそぐわない厳しい服装規定など、当時の大槌高校では、いわゆる「ブラック校則」というものが存在していました。そんな校則を、本格的に改定するように動き出したのが、校則検討委員会でした。この委員会では、生徒だけではなく、先生方と意見を交わし合うことを通して、みんなが納得できるような校則を考えて行くことができました。生徒側、先生側の、それぞれの主張に偏りすぎず、全員が校則に対して客観的に評価しあうことができたというのが、とても印象的でした。そのお陰で、生徒と先生の関係性も、以前より良化されたと思います。最終的には、ブラック校則というものは改善され、現在は在校生のみんなが、より実りある学生生活を送ることができていると感じています。学校全体が一丸となって、よりよい大槌高校を作るために活動していたということが、一番心に残っている出来事です。